

東北応援ツアーレポート

岩手県コース

1997年 文学部 錦戸 正子

「現地を訪問して想うこと」

東北応援ツアーに参加させていただき、現地の校友会の方をはじめ、被災地で生活し、働いておられる地元の方々の生きた声を聞かせていただいたのは大変勉強になりました。

中でも印象に残っているのは、三陸鉄道の職員の説明を聞きながら車窓から見た三陸海岸の景色です。震災から5年半経ちますが、まだまだ復興途中のところが多く、工事中の現場を何か所も目の当たりで見ました。防潮堤の工事ひとつにしても、津波の被害を受けた地盤という物理的な問題だけではなく、地元では「海が見えなくなる」という反対の声があることを職員から聞き、防災と美しい景観を守りたいという意識の間で揺れる地元の方の複雑な心境を知りました。

勉強会で聞いた現地の校友会の方の話では、みなさん地元の被災地の復興のために自信と誇りを持って努めておられることがひしひしと伝わりました。大船渡では小中学校3校が全壊したにもかかわらず、学校管理下で亡くなった子どもがいないこと、「釜石の奇跡」といわれる、子どもたちが先生より先に自ら逃げたこと、など沿岸部ならではの防災訓練・教育に努めておられることを学びました。

一方、震災後に仕事を失い、別の土地に移った人が多く、そのうちの6割が「戻らない」「戻れない」という選択をしている現状、今は復興作業の人たちで売り上げが上がっている商店も、復興作業が終わると落ち込んでしまうことが目に見えている問題など、残された課題が多いことを学びました。

震災から5年経ち、人々の記憶から風化されつつあるなか「来てくれるだけで復興支援になる」と温かく迎えて下さった現地の校友会の方々、地元の方々に深く感謝いたします。